

## ひきこもり傾向にある人は企業戦士にはならない

あらゆる分野における科学技術の進歩・発展と共に、新分野の開発が進み、それぞれの分野では新しい技術がしのぎを削り開発され、様々な企業活動が展開されています。その企業活動を進めるためには、その優位性を担う人々が自分たちの利益を守るためにはかなり無理をすることがあります。それは資本主義的競争社会における自然な流れでもあります。特に今日は IT 産業や AI 産業が目覚ましい変化をもたらしています。

そしてより安全な立場に立ちたいというのはまた人情でもあります。そのようにして資本の系列化が進んでいます。より大きなグループに所属すれば、より安全な立場に立てることになります。そのようにして企業戦士が育てられ、優遇されます。それが世界規模で展開されようとしています。そのような競争社会ではじき出される人々は引きこもり傾向にある人々ということになります。そのような心性を持った人々でも、様々なレベルがあります。そんな戦士にはなりたくもない、なりたくても成れない、なろうと思ったがなれなかった、そんな戦士には無関心等々・・・

資本主義的競争社会にすべての人を巻き込むことが一億総活躍社会なのだろうか。ひきこもり傾向にある人は役に立たないから、外国人を都合の良いように育てた方がまだ可能性がある。昨今の社会情勢はそんなところでしょうか。ひきこもりを大量に作り出したのもそんな世相の反映でしょう。人間の本性を善とするか悪とするかは古来決着のつかない問題でもあります。そしてひきこもり問題はその根本的な問題の現れでもあります。そしてその決着をつける 때가徐々に近づいているのかもしれない。

物理的な力で人を支配しようとする人々は性悪説に傾きます。徳の力で人を育てることに苦心する人は性善説に傾きます。これからの社会システムは当然性善説の原則を貫くことが大切になってきます。

(川島)



## 久々に（劇場）映画を観る



映画「あの日のオルガン」を観た。

1月17日、倉敷で試写会があり、映画通のHさんに誘われて、遠路、倉敷市の美観地区にある公民館に出かけた。

同映画のメガホンをとったのは、同市出身の映画監督・平松恵美子さんと、本作品の脚本・監督をした。彼女は「ひまわりと子犬の七日間」を監督。長年、山田洋次監督との共同脚本、助監督を務めてきた。主演は実力派女優・戸田恵梨香と、女優・歌手としてのフィールドを広げる大原櫻子、今後の映画界を牽引する期待の新鋭たちが共演、林家正蔵、夏川結衣、田中直樹、橋爪功らが脇を固めている。

この日は、2月22日のMOVIX倉敷での上映開始に先駆けて、地元関係者や支援者・協力者らを招いて昼夜2回上映された。

映画は太平洋戦争末期（1944=昭和19年）の東京の保育園が舞台。20代を中心とした若手保母たちが国の決定をまたず園児たちを連れて集団疎開を敢行。いわゆる「疎開保育園」の実話を元に描かれている。知られざるヒロインたちの感動の実話を映画化！ 幾多の困難を乗り越え、託された53人の子どものいのちを守った保母たちがいた。

戦時下という、極限の非常事態の中、必死で子供たちを守りながら戦火に散った保母のくやしさと、何とか生き抜いたが彼女たちが負った心の傷の痛みをスクリーンから感じ、涙が止まらなかった。

(以下資料より抜粋)

大切ないのちを未来へつなぐことを願い、毎日在必死で戦った保母たち。強い信念で時代を切り拓いていった彼女たちの生き様は時を越えて、今を生きる我々を魅了し、大きな勇気と希望を与えてくれる。

平松監督はこうコメントしている。「・・・何十人もの子どもたちと疎開を実行した二十歳そこそこの若い保母たちが幼い子どもたちの命を守るために起こした行動は彼女たちの戦争に対する精一杯の抵抗ではなかったか。」

(M Y)